

平成 26 年 11 月 18 日、法人職員の勉強会にて、「自立支援センターふるさとの会」の佐久間裕章代表理事にその活動や考え方についてお話をさせていただきました。ふるさとの会は山谷地域の日雇い労働者を支援するボランティア団体として発足し、現在は NPO のほかに株式会社など 7 つ事業体によって活動を展開しています。路上生活者や日雇い労働者、また地域で孤立しがちな高齢者や障害者を支援しているとのことでした。

ふるさとの会ではその人が路上生活者になってしまう前の支援に力を入れています。当事者がふるさとの会の支援を了解しそれを受け入れるまでには時間がかかります。それを認識し、まず基本的な信頼関係を作ることに心をくんでいるのです。支援者は当事者の状況を把握しながら支援を講じますが、しばしばそれは一方的な施しと受け取られ、当事者にサポートを拒まれることがありますと言います。良かれと思う支援者の振る舞いであってもそれによって疎外感を深めることはあり得ることです。そこで、ふるさとの会では当事者の納得や安心を築くためのかわりを「ケア前ケア」と称し、ケアが成り立つためのケアを重視しています。

ここはなかなか大切な視点だと私は思います。このことに限らずですが、支援は相手の立場になって考えた時にそれがどういう意味を持つのかということがよく吟味されていなければなりません。例えば自尊感情の低い状態だと自分自身への肯定的なとらえ方がなかなかできません。主体というものが立ち上がっていきにくいのです。しかし関係する人と信頼関係を築くことができると利用者のほうに自己効力感が湧いてきます。自己効力感というのはやればできるかもしれない、何かやってみようという気持ちが生まれることですが、これは自立への小さいけれども大事な一歩と言えらると思います。このことを実践しているのがふるさとの会だと思いました。良い刺激を受けた時間でした。

(平成 27 年 2 月)